



福島成蹊中高一貫

学校通信

令和元年7月5日
令和元年度
第4号

教育現場における不易流行

校長 本田 哲朗

日本は地理学上の宿命を持っている。周囲に海(豊富な水源)を抱え、地軸の傾きに由来する放射熱の差により、大陸性気団と、太平洋に発達する気団とのせめぎ合う場に位置する。境界に前線が生じ、勝負の行方で行き来するがそれが梅雨と秋雨をもたらす。ところで、この時期の季語は、何と言っても紫陽花が相応しい。校舎北の階段脇には赤・紫・白の三色の紫陽花が咲いているが、朝の鬱陶しい心を慰めてくれる。俳聖、芭蕉の言葉“不易流行”は、紫陽花ならぬ俳句の季語≡その季節の旬(不易)の感覚から生じたものではないだろうか。



教育改革がかまびすしい昨今、その不易に当たるモノとは何だろうか。ふと、そんな事を考えてしまった。何故なら、時代の変化に背を押されるように始まった改革に、基本的に遅れる事は許されない。それは、端的に生徒の不利益に結びつく可能性が大であるからだ。その意識から、ここ数年、この手の研修にはせつせと足を運んで来たつもりでいる。しかし、沢山の説明を聴いて、膨大な資料を読むたびに思う事は、常に何か釈然としないモノが残ってしまう事である。改革の一例だが、現在の高校2年生からセンター試験に替わり、共通テストが実施される。やれ、記述式だとか四技能だとか騒いでいるが…、だからと言って数学の本質が変わる訳ではない。英語の根本も変わらないと思う。ましてや国語(日本語)など、そもそも変わる筈が無いのに、と思う方が普通だと考える。何を言いたいのか解りやすく言うと、玄人筋では、“学問の本質は、そう簡単には変らないんじゃないの…”と言う見立ての方が主流だ。果たして、何が変わり変わらないモノは何なのか。実の所、共通テストに話題が集中しているのだが、国公立の二次学力試験や受験者の多い有名私大の試験等は、変わる話などほとんど聞こえて来ない。と言う事は、もしかしてこれまでのモノ(試験)でも、十分に目的は全うできていた…と判断しているのではないだろうか。

ところで、流行は別の言葉ではハヤリになる。そのハヤリについてだが、しばらくの間に、主に私大の学部・学科が随分つまびらかになったと思う。やれ国際○○学部とか、メディア■□学科…云々と。また、ハヤリのキーワードは自分探し…に・なりたい自分…云々と。ずいぶん昔のくくりで学んだ私には、読めば読むほど何を学ぶ学部・学科なのか解り難い。また、読んだ本での話だが、例えば養老先生や鷺田先生曰く、そもそも自分なんて言うものは無いんだよ…と言っているのだ。思えば、旧帝国大学等の難関大学は、殊更4技能や共通テストの記述にはあまり積極的でない。また、このカテゴリーの大学は、学部・学科も昔の名前で出ています…なのである。つまり、不易なのだ。時代に因らず自のスタンスで突き進める価値がある一方、時代に振り回される価値のある事は確かな事だ。だからこそ、自分の拘り(不易)は何なのか考え、時に試行錯誤し、その価値観を堅持する事こそが最良の道に相違ない。